



俳ソサエティ句集 ～山葵～

「俳ソサエティ」三十年の軌跡／まえがきに代えて

黒柳双掌・斎藤修風・毛里井静の三名を発起人とする「Half · Seriousな〈俳ソサエティ〉へのお誘い」というファックス文書(！)が发出されたのは、一九九四年六月四日のことであった。本案内状には、俳ソサエティ発足の趣旨として「平素、研究・教育に、あるいは業務・家庭サービスに心身を酷使して、ひたすらに忙しくお過ごしの皆様と、時に俗世界を脱し、わびとさびとに彩られた言葉の世界に魂を遊ばせる機会を共にしたいというところにあります」としている。「Half · Serious」としているのは、もちろんHalf · Jokingという意味で、気取らず・形式張らず・理屈をこねずという【三不主義】を基本精神としたい」という発起人らの心構えを反映したものとも説明している。

そして、当面の具体的行事として

- 年四回(春・夏・秋・冬に各一回)程度の投稿形式の句会の開催、
- 年二回(夏休みと春休みに各一回)程度の吟行(当面は日帰り)の実施
- そして、出来れば③不定期の句会報『山葵』の配布

の三つをあげている。

はいえ、それは到底「結社」と呼びうるようなものではなかつた。正直なところ、この会合は、「俳ソの画像掲示板」というネット上の対話の場と、「新春句会」そしてごくまれな「吟行」がすべてといふかなり雑ぱくな仲間であつた。俳ソサエティの仲間は二つの共通点で結ばれていたといえるだろう。一つはその職域が国際関係論の「研究」分野であったこと、もう一つは「酒好き」という嗜好を共有していたことである。

こうした趣旨に賛同して入会の意思を示されたのは以下の十一名の諸兄姉であった。なお、お名前の後の句は句会参加への「決意表明代わり」としてお願ひしたもの。

安倍公子（きみ子）

寝坊して駅に着いたら桜川

稻葉千晴（ ）

縁台で待つたといえぬへぼ将棋

岩橋伸枝（伸恵）

加茂雄三（董山）

甲府路を急ぐ車の暑さかな

黒柳米司（双掌）

ひるがほの性にはあれど炎天下

斎藤修（修風）

櫻川明巧（明陽）

佐藤榮一（真山）

宮本武夫（賽亭）

毛里和子（井静）

吟行や買ひそびれたる花菖蒲

山極晃（ ）

はや母の四十七回忌栗の花

次いで、同年一一月一九日には、千代田区の割烹（！）「味館（ミタチ）」で第一回句会が開催された。下記の写真は当日の集合写真である。



かのようにひ弱な基盤の上に設立された俳ソサエティが長期にわたり存続できたのは、毛里興三郎（荒人）・和子（井静）さんが、ご自宅前に亭々たる樺林があるところから「樺庵」という庵号までつけて小金井のご邸宅を句会の場としてご提供くださつたことに負うところ大である。井静さんは現代中国研究の第一人者であり、二〇一一年「文化功労者」として顕彰された。二〇一七年の講書始の儀には皇居松の間で天皇（現上皇）ご夫妻に日中関係についてご進講もされた大家である。

学の粹講書初めや淑氣満つ

双掌

ご夫君荒人さんは、定年後は一念発起され東京外大で「アラビア語」の習得に挑まれた由。俳号は、かの魔法のランプを駆使するアラジンに因むとお伺いしている。

もう一つ、わが俳ソサエティが飲み会と渾然一体をなしてきたことに関し、遠路石和からこれを盛り上げる鍋の材料（大量の野菜・自家製ワイン紅白各一升）をご提供いただいた笠原輪院・申山ご夫妻にも謝意をもって言及せねばなるまい。そもそも、葡萄園を取り仕切るなどという作業は輪院さんだからこそ可能なものの、軟弱なわらには想像もつかぬ世界で、ひたすら感謝の意をもつて痛飲・痛食（という単語があつたつけ？）するばかりであった。

その夫君申山氏については二つの点に触れておきたい。ご専門は中国近現代史で南京事件にご造詣が深い革新派の研究者である。氏の俳句そのものは一種独特的な雰囲気——いわば申山ワールド——を帶びており、折々思いもよらぬ「字余り句」をものされる。いわく、「少し早めに読めば字余りとは感じなくなるもの」だそうな。とはいえ、氏は地元で短歌サークルにも参加して研鑽を積んでおられるし、最近、第一句集『立葵』（本阿弥書店、二〇一八年）を刊行されてもいる。いわば本格的な歌人にして俳人なのである。

前述のように、俳ソサエティに集つたのは主として日本国際問題研究所・国会図書館・参議院事務局などに所属する虎ノ門・霞ヶ関周辺の国際関係専門家・研究者であつたため、われらの句が「社会的事象」に傾斜するという傾向が避けがたかった。いわく、不況・戦争・選挙などなど。それでも、われらは句会には十分に乗り気で、一九九四年の立ち上げいらいほほ三〇年にわたり連続して実施してきた。もつとも、顔をそろえるとまずは鍋を囲み、酒を酌み交わし、ひとしきり雑談に興じるのが定番で、なかにはこちらを目的に集つてきた諸氏もあつたことは間違いない。公平にいって、飲み会の一形態としての句会というのが正確であつたろう。

その意味で、忘れ難いこととして、仲間の三名もが【アルコール依存症】とその延長線上で天寿を全うすることなく早逝されたという悲劇をあげねばならない。このお三方はいづれ「日本国際問題研究所」の同僚でもあつた。その一人が、秋田出身の佐藤栄一（秀峰）氏、もう一人が山形出身でのシンク・タンクの出版課を担つていた齊藤修（修風）氏、そして長野県出身の玉木一徳（泰山）氏である。

俳句という点では、修風氏が一段高みにたつており、とりわけ

茶屋忙し天橋立走り梅雨
わが村に誇るものなし蟬時雨

修風 同

の二句は深くわれらの記憶に残つてゐる。

他方、人間的にもつともインパクトが強烈であったのは佐藤秀峰さんであった。かれの人となりについては「日本国際政治学会」の同僚諸氏にもその酒豪ぶりで名を馳せていた。かれが急逝されたのは二〇〇一年三月一五日のことであった。

群れ飽きて一羽離る、寒雀　双掌

秀峰さん逝去から一ヵ月後の四月一四日には、故人がこよなく愛していた武藏野・平林寺で追悼句会を催した。

この句会での高得点句は以下の三句であった。

嗚呼晴（一四点）

双掌（一三点）

輪院（五点）

花筏漕いで彼岸に着けるやら

花に醉ひ醉ふて人恋ふ師でありき

俺ここぞ若葉ゆすりぬ平林寺

三人目の玉木氏は、悲しむべきことにご家庭の不和を口実に酒浸りとなつた恨みがあり、天寿を全うし得ずに早逝されたのである。

鍋の座の一人欠けたる広さかな　双掌

わかれらの句会では、毎回参加者の互選による得点で「天・地・人」三賞を選んでいた。以下には、一九九四年の第一回句会以降の全句会と最高得点句のみを示しておこう。

- 一、一九九四年一一月一九日（麹町・味館）
佐藤東峰（のち「秀峰」） 長雨に訪う人もなく萩の花
- 二、一九九五年八月五日（檸里庵）
黒柳双掌 みちのくの無人の駅の蟬時雨
- 三、一九九六年一月二七日（平河会館）
黒柳双掌 悪たれがぐいともたげし初水
- 四、一九九六年九月二八日（青学会館）
齊藤修風 コスモスの咲き放題の過疎の家
- 五、一九九八年七月一～二日（一碧湖・稜光俱楽部）
櫻川明陽 紫陽花の押し花ありし古手紙
- 黒柳双掌 なつかしや母がなくぎの夏見舞い
- 六、一九九九年二月二〇日（檸里庵）
玉木泰山 かまくらの白きぬくもり燭に搖れ
- 七、一九九九年一二月一八日（忘年句会）
佐々瞬河（のち「みほ女」） 子らの声吸ひて幾歳鍋のひび
- 八、二〇〇〇年八月二日（檸里庵）
黒柳双掌 打ち水に老舗暖簾の藍冴えて
- 九、二〇〇〇年一一月二十五～二六日（バストール下呂）
稻葉鳴呼晴 薄紅葉地蔵尊の頬染めて
- 一〇、二〇〇一年一月六日（檸里庵）
黒柳双掌 父龜寿頑固一徹味噌雑煮
- 一一、二〇〇一年四月一四日（平林寺「むさし野」） 佐藤さん追悼
稻葉鳴呼晴 花筏漕いで彼岸に着けるやら

一二、二〇〇二年一月五日（品川・船宿平井）

黒柳双掌 棲み分けて海鶴ばかりや凍て干渴

小田川若水 みぞるるや一羽一羽の川鶴かな

一三、二〇〇二年九月一五～一六日（別所温泉・玉屋旅館）

玉木泰山 画学生戦に散りぬ秋古刹

笠原山猿（のち「中山」） 無言館妻を描きて逝きし秋

一四、二〇〇三年一月二五日（新春ネット句会）

佐々瞬河 採用の二字なぞりおり春隣

一五、二〇〇三年三月二九～三〇日（石和温泉・糸柳）

宮本賽亭 引鴨の発ちし水面や風光る

櫻川明陽 色も香も昼にまさりて梅月夜

一六、二〇〇三年五月一〇日（第2回ネット句会）

黒柳双掌 また一つ花の名を知る四月かな

一七、二〇〇三年一〇月一～二日（湯檜曽温泉・もちや旅館）

櫻川明陽 登るほど色めかしけり山紅葉

一八、二〇〇四年一月一一日（檸里庵）

笠原輪院 鏡餅ふつと笑みする道祖神

一九、二〇〇四年三月二七～二八日（真鶴・味豊）

黒柳双掌 遠霞けふの宿りはあの辺り

二〇、二〇〇四年一〇月二三～二四日（湯野浜温泉・潮音閣）

毛里井静 庄内に台風一過捨案山子

嵯峨紫文 月白く風唸り上ぐ出羽の浜

二一、二〇〇五年一月八日（檸里庵）

宮本賽亭 雜煮食ふ孫の危ふき箸使い

身の大に合わぬ胴着や寒稽古

二三、二〇〇五年一〇月一五日（裂石温泉・雲峰荘）

嵯峨紫文

秋草の彼方は富士か峠道
毛里荒人 虫の音や夜陰の底に命あり

嵯峨紫文 ひからびし虫の骸を雨送る

三四、二〇〇六年一月九日（檜里庵）

黒柳双掌 寒月に菴を見しはいつのこと

二五、二〇〇六年三月三一～四月一日（喜連川吟行）

毛里井静 古桜にいにしえ人の声聞かむ

二六、二〇〇七年一月八日（檜里庵）

毛里荒人 行き過ぎて戾れば冬の桜かな

二七、二〇〇七年四月二八日（武藏野吟行）

毛里井静 国を分く寺廟を越えて黄蝶かな

二八、二〇〇七年一一月一七～一八日（石和・日の出温泉）

佐々みほ女 子を膝に蜜柑むく日の遠かりき

二九、二〇〇八年一月六日（檜里庵）

毛里井静 歳めぐり獅子舞の子の逞しく

三〇、二〇〇九年一月一一日（檜里庵）

宮本賽亭 正座する母の背丸し福寿草

三一、二〇一〇年一月九日（檜里庵）

黒柳双掌 滕の子にまた吹いてやる薺粥

三二、二〇一一年一月八日（檜里庵）

笠原申山 木枯の掃き清めたる星の天

三三、二〇一一年一〇月一日（石和温泉・君佳）

毛里井静 百体の仏の笑みや乱れ萩

三四、二〇一二年一月七日（檜里庵）

毛里荒人

家々の歴史をつなぐ雑煮かな

三五、二〇一三年一月五日（檜里庵）

小田川若水 初場所や棧敷彩る艶姿

三六、二〇一四年一月一三日（檜里庵）

黒柳双掌 母見舞ふ遠き家路や初景色

三七、二〇一五年一月一二日（檜里庵）

櫻川明陽 一瞬の切つ先あがり寒稽古

三八、二〇一五年七月九日（金沢・すみよしや旅館）

櫻川明陽 加賀言葉これも一品夏座敷

三九、二〇一六年一月九日（檜里庵）

小田川若水 淑氣満つ神話の島に波静か

黒柳双掌 荒行に裸形辨めく淑氣かな

四〇、二〇一七年一月一五日（檜里庵）

毛里井静 初硯喜寿を迎へて夢と書く

四一、二〇一八年一月二一日（檜里庵）

櫻川明陽 すずやかな赤子のまなこ福だるま

四二、二〇一九年一月一四日（檜里庵）

稻葉鳴呼晴 菜園の四温のバケツ薄氷

櫻川明陽 指呼の間四島（しま）も三寒四温かな

四三、二〇二〇年一月六日（檜里庵）

佐々みほ女 初春やただ居ることの有難し

俳ソサエティについて最後に特記すべきは、「新型コロナ・ウイルス感染症」（COVID-19）のこと。二〇二〇年早春に「ダイアモンド・プリンセス」という豪華クルーズ船の乗員乗客が集団感染（いわゆる「クラスター」化）したあたりを発端とするCOV I D19禍は、三つの波を形成しつつ、三十万余の感染者を生み、政府・国民を前代未聞の苦境に陥れた。政府は、二度にわたって「緊急事態宣言」（いわば戒厳令）を発し、飲食店の営業自粛、国民の外出自粛を求め、懸命に感染拡大の抑制を図った。企業や学校ではインターネットを利用して「テレ・ワーク」や「遠隔授業」が推奨された。かくして、わが俳ソサエティでも一九九〇年代央より吉例となってきた「新春句会」の開催を自粛せざるを得なかつた。

当時急速に浮上してきた「ZOOM」という遠隔ミーティングのツールを活用して「新春ZOOM句会」案が浮上し、現役教授の稲葉鳴呼晴さんがホスト役となつて、リハーサルを挙行して実現性が確認され、二〇二一年一月二三日（土）午後二時、俳ソ史上初のZOOM句会が実現され、毛里荒人・井静、笠原申山・輪院、櫻川明陽、稻葉鳴呼晴、佐々みほ女、安倍きみ女、および当方の九名が参加した。

初日記・古日記・團鑑を兼題とする新春ZOOM句会での最高得点句はみほ女さんの

読みぬまま棺へ夫の古日記

みほ女（11点）

で、あつた。さらにみほ女さんは

来し方はつづら折りなる老いの春

（4点）

コロナ禍に逝く人あまた冬銀河

（3点）

を獲得して、ぶつちぎりの最多得点者となつた。

ZOOM句会（その後、手続き上の都合で「Skype句会」）はその後二年余り定形となつたが、それぞれの最高得点句は以下の通り。

二〇二一年新春

はけの道ゆるゆる辿る木の芽時 荒人
同夏季

北斎のやがて画となる青田かな 明陽

同秋季

収穫の葡萄畠へ御礼肥 申山

二〇二二年新春

病窓に上がる歎声初日の出 荒人

同春季

人たれも秘めしこともつ臘月 申山

同秋季

生きてゐる独り爪切る半夏生 申山

同秋季

色恋の欠片も失せてただ秋思 双掌

二〇二三年新春

蟄居はや三年旅は双六で 荒人

同春季

春雷や異国のいくさの音に似て 井静

同夏季

手花火や笑顔の先の深き闇 みほ女

同秋季（井の頭公園吟行）

湧水に黄葉ひとつひら舟となる 明陽

二〇二四年新春

若潮を汲める能登の海還らざる 申山

最後に、当初会員に名を連ねられたが、その後あれこれの事情で句会から足が遠ざかっていった諸兄姉についても言及しておきたい。

山極晃（栗毬）中国近現代史家（故人）

花も見ず酒杯も干さず友逝けり

中村平治（空桶）インド政治研究者（故人）

初春やガンガーの水清からず

加茂雄三（薫山）ラテンアメリカ史学者（故人）

歴史あり四条河原の枯れすすき

小田英郎（霧岳）アフリカ研究者

ザンベジの芒穂ゆれて象の影

宮本武夫（賽亭）参議院事務局

すすき葉を飛ばし競ひし日を想ふ

山本武彦（山彦）早稲田大学名誉教授

初めての出会いも和む花火の輪

志鳥學修（鹿山）武蔵工大教授

涼しさを花火に映し妻の顔

嵯峨隆（紫文）静岡県立大学名誉教授

戾りたる賀状無沙汰を責むがごと

小田川興（若水）朝日新聞論説委員

還暦の年酒温め独り坐す

このように、旧知の間柄で多士済々なメンバーによる句会で、和気藹々として笑顔が絶えない場でありながら、相互批判となると歯に衣着せぬ丁々発止・侃々諤々たる論議が展開されてきたのは自然の流れであった。

荒人・井静ご夫妻は本句会の最長老で、「老成した感」のある句をものされるが、ご夫妻の間に相通ずるもののがおりなのか、何らかのテレパシーの働きか、選句において相互の句を取られることも少なくなかつた。次いで申山・輪院のお二方には、日常生活上の齟齬のようなものが覗えるような掛け合いを聞かせていただいたが、輪院さんの献身的な葡萄園経営への感謝の念が申山さんの出句に余すところなく表され、両者のギャップに多くの句友の笑いを誘つてきた。

頑健な体躯の持ち主の明陽さんは——参議院事務局調査員というご経歴を反映してか——内外時事を描いた句も多いが、季語の世界にも造詣が深く、キラリと光る句をものされてきた。

みほ女さんは、ご高齢のお母上・伯母上の介護に励まれていると聞くが、出句にもしばしば母上が登場される。自然体でフェミニンな香りある句を詠まれる。

きみ女さんは旅行・寄席・くずし字など多趣味な女性でありながら、その句は氣っぷのよい、いなせで「竹を割ったような」雰囲気を感じさせる。

鳴呼晴さんは、句会でただ一人の現役（名城大学教授）で、海外調査のため頻繁に世界を駆け回っておられるため、句会への出席は残念ながら少なめである。

最後に古川恵寿さん。リモート句会にはご参加されなかつたが、吟行ではいつも賑やかに場を明るくしてくださいる貴重な存在である。

末尾ながら、本句会が会員諸兄姉にとつて貴重な憩いの場であり、みのり多い癒しの場として長く記憶に残るものとなるよう祈念して「俳ソサエティ句集（山葵）」のまえがきをした。

ちなみに、句集のタイトルを「山葵」としたのは、わが句会に侘び・寂びの感興に満ちたものであれとの願いを込めたものである。

【黒柳双掌記】

交遊抄

1965年

巧氏（金沢工業大）、稻
谷叡トの日本倍公子氏（邦樂社）、安
国際問題研究所で研究員を多才濟々だ。天も「死人」
していた。70年に細身の恒例の新春句会は拙宅
青年が入所してこられた。70年に細身の恒例の新春句会は拙宅
お付き合いいただいてい
る黒柳米司氏だ。

ASEAN研究の第一人者で、かつては副学長として大東文化大学を率いてこられた。そんな先生を西段は双掌師匠とお呼びする。

94年、彼を中心にして十数人の俳句

結社「俳ソサエティ山葵の会」を作った。以

（都留文科大）、櫻川明授

俳句の師匠

毛里和子

次句が印象に残っている。この

村に誇るものなし

（故・斎藤修風作）「ふりかえりか
えりする紅葉かな」（毛里人作）。もちろん双掌

師匠の名句「道間へば辛夷の辻を右へとぞ」など

である。（もうり・かず）

『日本経済新聞』朝刊、2015年6月13日「交遊抄」



【春】

旅立ちの初志堅かれと春寒し

早稲田大のゼミ生を送るに際して

師は見ずや麻布に落花盛んなり

遠霞けふの宿りはあの辺り

俳ソの真鶴吟行で、真鶴半島の遠景を

春炬燵女房殿の鼻眼鏡

当方は藤沢周平を読み、女房殿は編み物
春雷に急かるゝごとき別れかな

東洋英和短大の卒業式は荒天で

かねて聞く常春慕ふ旅出とや

娘の義父の逝去を悼み、義母に贈呈

うらゝかやこともなげなる癌告知

獨協病院の医師「肺がんですね」とあつけらかん

惜しきまで百花咲きつぐ四月かな

初めて「朝日俳壇」で入選（稻畠汀子選）



【夏】

今年また花ある旅の立夏かな

ひたち海浜公園はお気に入りの場所

七夕や孫の短冊逆さ文字

その孫たちも今や高校生

技語る飛騨の匠の額の汗

母校岡崎高校の同級生らと飛騨高山旅行

球児らの汗泥涙清々し

甲子園での熱戦は常に感動的

兄の靈今どの辺り雲の峰

兄はALSで発症から三ヶ月で急逝

愚直なれ母の諭しや立葵

亡きお袋様の口癖「真面目にやりなよね」

梅雨晴れ間露地に繰り出すもへじかな

子どもらが地面いっぱいにチョークで落書き

色恋を忘れて久し冷や奴

文字通りの実感

【秋】

雲間なる秋天の色たゞならず

岡崎高校の同級生らとの安曇野旅行

食ふて寝るのみの病棟夜長し

腎臓の部分摘出後の入院生活

潮騒に問ふて問はれて暮れ早し

日本国際政治学会で瀬戸内へ

杉玉や旅の昼酒許されよ

岡崎高校の同級生らと飛騨高山旅行

世を拗ねて蠍蟬群れを作らざる

結核病棟での入院は監獄めいて

故郷を忘れたるかと柿熟る、

両親が亡くなつて以来次第に足が遠のき

孫招き影踏みしたき良夜かな

「良夜」という季語の魅力は格別

予後の身を踏み出す街の残暑かな

肺結核で一八ヶ月の入院を終えて



【冬】

群れ飽きて一羽離るゝ寒雀

佐藤秀峰さんの急逝に衝撃を受けて

己より若きも逝くや冬深し

昨今では新聞の訃報には必ず注目

寒月に菟を見しは一つのこと

今も冴え冴えとした月面が好き

美濃寒し円空仏の鉈の冴え

岡崎高校同級生の女流俳人の添削求め

遠富士の威儀に寄り添ふ寒夕焼け

越谷も折々見事な影富士が遠望できる

懐手触るゝあばらも傘寿かな

体重「減」は当方にとつて最大の心配事

湯たんぽや寝床に書斎居間廁

当方、名うての寒がりにて

鍋の座や一人欠けたる広さかな

おりに触れて玉木泰山さんを思い出す



【新年】

数へ日や明窓淨机整はず

書齋の整理は毎年の課題だが果たせず

荒行の裸形躊躇めく淑氣かな

年末に多い寒行のＴＶ映像を観て

初暦まず医通いの丸印

定年退職後、ダイアリに空欄増えたが

父傘寿頑固一徹味噌雑煮

亡き親父様の大好物だつたなあ…：

聞くのみとなりて久しき除夜の鐘

二昔ほど前には「撞きに」いつたものだが

夢問はゞ醉ふて半眼寝正月

禁酒禁煙となつたのはいつ頃からか

屠蘇に飽き茶房に憩ふ至福かな

スタバ賛歌

道すがら唱へて来しか孫の賀詞

孫らの一月二日の年始はいつまで続くか





【春】

不世出のヘンなオジサン惜しむ春

コロナ禍の恐ろしさを志村けんの急死が世に知らしめた。

振り向かぬうしろ姿の朧かな

さよならしてから一回くらい振り向いてもいいじゃない。

春の日に残酷非道の性悲し

ロシアのウクライナ侵攻に。

頬寄せて朝寝の父にねだるもの

娘は父におねだりがじょうず。

確執を越ゆるすべなく春炬燵

どうしても許せない事を許すことはできるのか。

絵筆手にあなたの似顔春の雨

春の雨は身も心も緩めてくれる。

(夏)

処女作の評判高く鮓食へり

次男のまんが『不思議の国のバード』が朝日新聞の書評欄に載つて。

緑陰や子らの駆けよる水飲み場

子どもたちをよく公園へ連れて行つた夏の光景。

待つ日々に倦みて薄暑の路上飲み

コロナ禍の巣ごもりに飽き、路上で飲む若者が増えた。

緑陰に読書する日の愉悦かな こんな日が最高。

青葉風すれちがう人きみに似て

街を行くと亡くなつた人に似た人を見て、はつとする。

手花火や笑顔の先の深き闇

軒先の花火はそこだけが明るくて、まわりの闇がどこまでも深い。

夕まぐれ吾を通りすぎ児を刺す蚊

幼子はおいしそうな血のにおいがするのか。

西日さす読経の伯母の小さき背に

お仏壇にお供えと読経を日々欠かさない。



【秋】

梨むけばやや賑わへる老いの卓
初物はうれしいものだ。

みほ女

疎まれつ地蔵によりそふ死人花

彼岸花は庭に咲くと忌み嫌われた。

こほろぎの絶えし闇夜のしじまかな

コオロギの鳴き声をいつまでも聞いていたかつた。

子ら去りて部屋のかたすみ秋思あり

息子たちが巣立ち、一抹の寂しさ。

この桃のごとく生まれよお腹の児

長男の第三子誕生を控えて。

落ち葉ゆれ人待ち顔の舟つき場

井の頭公園では若かりしころ夫がよくボートを漕いだ。

井の頭いのちの水に黄葉散る

湧き水は善福寺川となる。

天高し紺鯉真鯉の口や口

池には麁を求めて鯉たちが口をバクバク。





【冬】

寒稽古帶結ぶ手に朝日かな

習つていた空手教室では冬の素足の冷たいこと。

寒稽古子らの声音のいや高く

冬の空気には子供たちの声がよく通る。

三寒に静寂の滝四温待つ

滝も凍る嚴冬に。

遠き日の父の姿や冬木立

口数が少なかつた瘦身の父を思う。

山茶花や散り積もる紅そよぐ白

庭にも散歩道にもおびただしい落花。

夢叶ふ夢より覚めし日向ぼこ

ステージで歌う舞姫になる夢は、やはり夢だった。

毎日蕎麦よそひ肩の荷おろしけり

三六五日夕食を作り続けて一年が無事終わった。

寒椿義母と競ひつ落ちにけり

いさぎよく生きた義母は、椿の咲くころ逝去。

【新年】

珍客の名をまず記す初暦

久々に会う人の来訪は胸が躍る。

人の世のすごろくに似る運不運

人生の何割が運なのか。

地震襲ふ初春の宴をことほぎを

能登の人々も宴を開き新年を祝っていたのに、そこを地震が
襲つた。

老母にはちぎりて入るる雑煮餅

お餅を喉に詰まらせたらたいへん。



「新春 Skype 句会」(2024-1-10)

